

中東の重層的な混迷から ODA を見る

Analysis for Multilayered Turmoil in the Mideast to Official Development Assistance

1 はじめに

2003年3月、米軍などによるイラク攻撃が開始された。その後筆者がイラクの戦後復興から現在の円借款事業に携わることになるなどとは全く思いもせず、戦闘開始の様子を当時のテレビにくり付けとなって見ていた。

筆者は技術コンサルタント会社に勤務して航空・宇宙部門の技術士ならびに電気通信のエンジニアとして数々の ODA（政府開発援助）に参加してきた。そして、60歳の定年退職を機に大学に移った。今まで実施してきたプロジェクトを技術面よりも歴史や文化を通しての社会変容という面から研究してみたかったからである。本稿では筆者が2004年7月から今日に至るまで携わってきたイラクの通信プロジェクトについてその活動の一部を紹介し、研究対象に至るまでの経緯を説明する。

ODAによるイラク通信プロジェクトは2004年7月の概略設計を皮切りに無償資金協力事業として2010年7月までの約6年を費やしてイラク北部のモスルから南部のバスラまでの約900キロメートルに亘る無線通信伝送路を復旧させた（図1）。その後は2013年12月から円借款事業としてイラクの首都バグダッドに15万回線の光通信網を現在施工中である。

振り返ると、2004年からの無償資金協力はイラク戦後の混迷からの「秩序づくり」で、2013年からの円借款事業は技術による「人づくり」の期間であったと考える。ODAによるこのふたつの通信プロジェクトを通じて、イラクの関係者たちに対しては秩序づくりと人づくりに多少なりとも貢献できたと信じている。

2 混迷からの秩序づくり

米国を含む多国籍軍とのイラク紛争は2003



図1 プロジェクト位置図

年5月に短期間で終結した。そして、国際社会によるイラク復興支援の開始は早く、日本政府は生活インフラや病院などへ総額15億ドルの無償資金援助を行っている。プロジェクトでは空爆などによって損傷を受けた通信施設（写真1）のうち特に復旧の緊急性が高い設備のみを援助対象に含めた。



写真1 戦闘で破壊されたバグダッド郊外の通信施設

「秩序づくり」への貢献した点は業者選定の際に導入する入札制度である。好き勝手に業者を選ぶという従来の方法に代わり、一定のルールに則って技術レベルと提案価格を審査することで最も適切な業者を選ぶという秩序づくりである。この入札制度により競争の公平・透明性が保たれることをイラク側には理解してもらったと思う。また、プロジェクトの運営はステークホルダー間の

契約に基づいて進められ、規則を基本とした社会秩序のあり方をイラク側が身につける機会ともなったことであろう。

3 技術による人づくり

無償資金協力事業の完了後、2013年12月にスタートしたODA円借款事業ではコンサルタントは設計を行い、そこで描いた通信システムを実際に構築するための民間業者を選定し、完成までの施工監理を行う。この一連の流れにイラク政府のカウンターパートに加わってもらいながら、様々な研修に加えプロジェクトで日々発生する課題への対応の仕方や技術の進歩などを学んでもらった。

写真2はイラクの隣国ヨルダンでコンサルタントが実施した研修風景で、プロジェクトの運営方法について5日間の研修を行った。また、業者が選定されて施工監理が始まってからもイラクの顧客、コンサルタント、業者による三者協議や多種にわたる機材の性能検査ならびに技術トレーニングの場がイラクの関係者に提供されて「人づくり」の一翼を担うことになる。



写真2 筆者(手前)の説明に聞き入るイラクの研修生たち

4 アカデミアへの発信

上述のように、ODAによる通信プロジェクトを通じてイラクの戦後から一貫して秩序づくり、人づくりに携わってきたつもりであったが、それらの成果は皮肉にも現在見られる中東情勢の混迷に埋もれてしまっているかのようである。そんな中、技術士の次なる方向性として考えたことは、これらイラク通信プロジェクトを国際協力という

学問分野の論文として纏めるために中東の混迷を分析し、ODAという視点からアカデミアである研究会や学会へ投稿し発信することである。

そのためには中東の歴史や文化的背景を含めた議論が不可欠なことから、通信インフラの構築を通してODA事業が与えた影響をイラクの社会変容という現象の中で捉えることによってODAの成果を抽出する必要がある。方法としてはオペレーショナルリサーチの問題構造化手法や非形式論理学に依拠しつつ錯綜する利害と理念の構造を明確化してモデル化する。

イラク通信プロジェクトからは様々なことを学んだ。例えば、治安の関係でコンサルタントがイラク国内で作業することが難しい状況下において、いわゆる遠隔管理で約900キロメートルに及ぶ無線伝送路を完工させた。また、テロが頻発するバグダッド市内に15万本相当の光ケーブルを敷設する際に必要なリスク管理などが挙げられる。いま、これらの体験を現在混迷するイラクの社会情勢と合わせ分析し論文として編集中である。

5 おわりに

技術士は計画、設計、分析、評価など様々な業務を体験しているので技術論文や報告書の作成には手慣れているが、社会情勢の分析などは得意としない。筆者は、イラク通信プロジェクトに携わって技術だけで解決できない多くのことに直面した。その解決にはどうしても文理融合の戦略的思考が必要であった。

これらの経験を今後のよりよいODAに生かすために、これからも過去や現在の体験を知の遺産に編集しアカデミアへ発信していきたい。

谷口 友孝 (たにぐち ともたか)
技術士(航空・宇宙部門)

東京大学大学院 客員研究員
イラク主要都市通信網整備事業
プロジェクトディレクター、APEC エンジニア、
IntPE (Jp), Sen. Pro. C.E.
e-mail : dr@tomotaka.name

